去来農句集

我世ニ生レテ十六ノ年ニ成テ孔子ノ教ヘ聖人ノ道ヲ
ナラヒ学ブ事モ智恵第一ニ孔子ノ神道第一ニ
仁義ノ和ヲ第ニスル事ヲ聞シ得テ
徳ヲ本トシ学ビ行ヒ孔子ノ教ヘ聖人ノ道ヲ
学ビ得シ道ノ有リカタヲ
芭蕉翁ノ風雅ノ門人ニモ成テ句ヲ
花ヤラ月ヤラ文ヤラ歌ヤラ狂歌ヤラ
ナニ浮ケ六ヲナラヒ学ビ四季ノ寄ヲ文ヲ
ナラヒ学ビ行ヒシ如ク己ノ好

世の句作の上をしるよりてかくこそ承るのさりしよ
習ひ得たる者ハ十に一にしてこれ蕉翁一人の教より
出たるものにして其句我の方に近き所これ世に云ふ
の十哲子孔子の十哲の数になそらへしとされ
は其門人多き中にも関東にては其角嵐雪
といひ京にては去来丈草といふ其外の雑兄
の上足なれとも其角嵐雪は風雅を私にして
其業にしてから名利の境にかはりては
流れを汲む者も多くて其角は五元集嵐雪は
玄峰集なといふ人の家の集ありて世にもてつたふ

さる故去来丈草は蕉翁の直指をまもり
ひとへにおさめす風雅の名利を除くといひて其
指導微笑のこころをよく修して一世の終りまて
ともに著さす一人の門人もとめされたりしを
其角の句を書集めし人もあれとも其句を
去来は蕉翁の風雅の骨髄をよく人に伝へ
故に二人の風雅をまなひて遠く伝ふ
に指ひても指まなひてきこの風雅を修して其教
かくてむかしをしのひ雲間の月は秋の月に
うかれてさき秋の山や原の尾花を思ひの心

のすたれたるをあつめて一のしるしとすなるに
因ひ出ゐる書集めたる発句を久しく衣嚢
に蔵めかくし置しをことし嵯峨の重厚
粟津の魯江の二房が写さん事をあながちに
乞ひもとめぬるまゝにせしものなるをや
窓の外に出しをいへる古人は何をか嘲るらん
そのかれ

明和八年卯の春二月東山岡崎の里
五升庵にて
蝶夢記

去来姓は向井名は平次郎(?)といふ芭蕉と
肥前長崎の人なり彼地の聖堂祭酒乃
氏族にして世々儒を業とし博く書記(?)を
よく文暦学をきはめ詩歌を能くし兼て流
勇ましくて撃拙を制す都にありける比
このしは殿下に仕へまつる官祿の比より芭
蕉翁に従ひて俳諧の風雅を学ぶ鴨川
は東の聖護院村にすみ嵯峨は小倉
山の桂林(?)の庵をいひて行由(?)にある秋
のころ庭上柿の落しをみてなん其庵を落

[illegible]

去来發句集

春

[illegible]

月雪ふるあるも寒くし門の松
猶り霜もよきかとそんぬるかな
わら葺つくるかやらうそん俵

時雨まつあるかな

まつや枝ふる母波の鹿も鳴くを
学ふ鶴や鶴しらふ作ゆくも
うくひすの音つよふ春の日二三日
鶯や田のもの鶴うくひす
学ふ雪ふるふくくたちたる春式
ちくひすの鶴のまんちゃや谷の風

学や雀ようけり枝うつ東
芸鶯ふるまくひら鶴ひらふ作の色
風却うくひすふる東もそんと
毎年春をしらくと
うくひすうくひすの人の春似ると梅の蕾
被てくくる春ふる梅ふれ枝ひられ
上箱の山花ゆくしく春
作し作りて
梅こう春や山陰分入犬のまま
雪衣や海より春をうくひる花

五六ばかりてきたる柳の下
意くしと人をとまるやうなるきれ
まさ柳の木くいてる趣ふ格子まま
姑乃ままの人を柳こう紙
多孔しくまよ四畳のたけくの徽月
雑事きき事ぬ和とるれて徽之

徽月一足つこうわられる邦
寄魯町布四へ物ふる
まとまるかり中る春ふう徽月

学ばしに事てきうすや猫の恋
うき夜まのまれる猫ぬまるあ
牛京やこ足あれども猫のこい
いくすんの景れ四年の触この事
田孔蜂や蝿とか負てくるく陸
一蜂ふまふまし帝中む陸の邦
蝿つかもひ一はけと雑まのわる院
雑乃たうしこうんぬし孔雛
帰ふふをあつまる雁よ海のまふ
於ふも行ふもまふぬ蒸つふか

山雀の音ばかりも別れ
振舞やすらひもとまるまで雖
とり帰の法師なれぬ源氏
うこくもつくつくほうし男
陽炎や見もとまらぬ雨の
神鳴やすらひ雨のさつき
夏風や吹ぬ日なし
路きゆきもとまらぬ名残やはるの惜
丈なるを哭き

元十年孔雀の姿を化し
ぬ姿をまのあたりに
をまの四方をまわしこうと行
を語る仏のこと
なき名文くまやこと世に別
花をもつる数よりもまさる
西行の和歌をうけて頼政の海を
頼政の孫きも人を打ちとる
れ侍をまつり馬より落ちた

[illegible]
花雪や白きをちらき会せ
知る人もあいしくこの花ゆえの事
何ゆえ花人の長力
咲く花ゆえ世に人の神せり
[illegible]
小袖ゆえ花のしや宮の花
一枝ゆえ何に花さかる
花ゆえもゆえ里の犬の声

俳上に花

花ゆえ眼入り志賀に浦
立居の詩り多さよ花の中
四上に花ゆえ花ゆえ
海ゆえ月つきも出る春の声
山深ゆえ入りて
木の実に天狗も今ゆえ花の友
南都般若乃奥に間
変ゆえ花や般若乃奥に間
散銭も用ゆえ散ゆえ表ゆえ
花ゆえ銭の間に山

[illegible]

一しるしとやなる桜

ハチ一ちゑ山ぬしとうとや鶯

[illegible]

冬 石

山ぶかみとけぬうちを松の雪

数々花やあけぬりぬ冬梅

石ぬしも春をまつ菜つくた

菊ぬしの[illegible]

[illegible]

石塔もとやはつくや[illegible]

三月ゝ文ゝ書のも名残うれ

[illegible]

神風ぬ海ぬ[illegible]

夏

郭公なくや垂柱と十ゑ字

うゝれ出ゝ[illegible]

光寺ゝ[illegible]

[illegible]

吉野なる蔵王堂の
横手の谷や山ゝの郭公
保ちそめたる
うゝしさも
ゆゝしの
ゆれの
西山
新宮や
熊野
なほあゝしうとゝ
初瀬
おもあゝしうる
郭公

伊勢うて
石の花も海のかなたや
うゝ
迎禮の
和歌の
光あふ
色ゝの
つゝ
舟

鯖鮓はまたまへぬ桐の花

元禄七とせ久しく旅くりし京
我ふ行れける拝しけるに
旅新に蔡て自ら一句筆
竹のまや畠に謙す思ふ事
武士のまふ外は長をいまぞ
筆のかほより走し事も竹
湖の水かさり行りの五月雨
業ましくよこも月かむ五月の今
大和紀伊の境をたるし頃まで

陸奥の順礼と云へるがよめ
るはれる料足つくしけるにや書かける
つくりもとてもし旅や五月雨
西より行ける崎のまも
五月雨に流むや紀伊の八荘園
曲水までいふそれを柿因の葉
見てまつの以係まて夕へ語らせよ
つきそうの物を語れを拝毎
をとさしかしるの

ほとゝぎすや黒津の椿見えぬ

螢火や吹とられて草の闇

蚊やり火すまりの傍に

手をあらはしに清水わかるる所

水札帝や魚籠しる山岩の上

鶏もなく時の水鶏あるく

石垣や浅瀬あるや測る船

只和の中をもれる樹の

蛙聚しる者ともきき分る

お津へ着して

山里の秋の中に蛍ひかり

千曲川の毋乃坪に

秋もなほ梅の中

雨の柴と秋ものやハ秋ち原

谷汲寺にて

順禮も赤や襟の飯の飯

すくなきや深山のさくらの

立ありく人まもきれてすくなる

原しもの夕ちるのうち入日の雲

町もしもふる仏のみみ

文も書を傳ふまもなく

猫

猫の子乃中にそれなる女　御序の兀

紀伊の藤代と申す所に鈴木
三郎重家の末今にありとぞ
乃ふめれ共名高かりしに鈴木党

押廻し鋼の馬の名をたてる笑

紀伊路の家にいとしき武士の里

また庭の見ゆる稀なり

藤

藤しげりやこひしき口まてに

鈴木も女も人の言葉も

すくしても山の家の宮の

夕まくれ旅草鞋して帰りけり

夫くらくに森れた涼しき夕の雉

芦の葉乃ちらぶまどろむ足の卵

石も木も照りまされ暑さのみ

美濃の国の人の松のうら

ころあつくやくの松の風

作この人の松の梢の

同し題にて

夏のみけてこの葉も人の暑さの

葉のくれとみ出る風の暑さのみ

花ちる川や薮のひこの人は雲の峰
夕ぐれや瓜なくひたる雨は来ず
伏見の舟中より都の方をながめて
夕立は雲もひのくらす都のそら
六玉川は絵にあり
六玉川ひと時のまに清水の谷
縄の為に殿 ともさん土用干
夏の夜月は竹のみくれし竹の露
深草乃篠ばらより上り侍る
むつまし里へ二つ飯は 姫の前子

夕立や名のとほしけり花は稲
酒まつ遊所の居を移せし时
門外ま寺 自由をまつるよの今

秋

銀河ゆ夜ふや神秋は月数れ
うち出く窮のうしろや玉の海
酒盛をまつるて酒の空星むこの
篠の里の馬場より出る哉

多くても沖へ出て雨も踊
しほるとりふる年も
七夕をまつてや多くの舟踊
常々とも此邉りに漁又は
妻恋のゆくゑもしらで七夕七日の
夕まで網を張りて星合の夜を明かしも
うちつけに星も川越や浦の宿
魯町が旅にて
山口や舊の手向星祭の人
竃拵のゆるをつりのしや新の秋

妻子おくれたる人の許へ
麻道をゆくのみしやうき魂祭
年経てまたも帰りけれ
みし人も孫子となりて墓参り
踊子よ盆の細のなをぬのん
紅葉や松に岸に時雨霜
秋の日は暮れてあすのこととゝれなり
神無月や榾の臥芝の起より
霜落て庭ことごとゆき木陰集
悼風圓

朋夕まとうふる秋袖の露

嵐蘭追悼

夕買ひ剣ふめりり 苔

拾ひ常盤ゑまつりふるとふる

ふを相しまをふる人を偲ふ

露ふりふり世世の秋身をの花

芭蕉翁ふ翁ふ世の面ふを持を

ふを書寫の写ふ書付ける

めれつ干つ筋やつりを袖ふ雪

稲妻のかきやふを写夜式

生涯九山ふを

ふりつ万やふ傾城ふる枕

都ふも住まふりふふりふ

浅茅生やふふ毛の雪

ふ稲ふふやふふふふふ

田上ふを

山ふふふを魚ふ雪ふふ稲のめし

ふけ採ふふふふと把つふ面ふふ

尾採ふを馬ふふふる花ふふき

ひふふふふふふふふふふふ

君ゝ手もとしらへしむる歌
岩鶏や家ゝもひとり月ぞ宿
育より唖ぞかゝはぬき月ぞ
名月や海もたもとを山もつる
名月や柳ゝうまうす桑のうら
月見せん伏見の城の捨郭
名ゝゝゝむこの柳を過ぎゝ
年ゝゝゝゝゝゝ月ぞ
思いそ月ぞ恋ゝむ旅の月ぞ
旅くゝも東向ゝん月ぞ

横
行ゝ雁ゝゝゝ方や西ぞ月
淀ゝゝゝゝゝ月を打ぬゝ
休見仕ひゝれゝ

月
ぞこゝゝし我里人の業ゝ
世ゝゝゝゝゝゝゝゝ
里ゝゝゝゝゝ京ゝ帰ゝゝ

鴨川や月ぞの家ゝ
ゝゝゝゝ行ゝ

浦
人ゝゝ桑ゝゝゝ月ぞ
長崎ゝゝ田上ゝ藤森ゝゝ府

名月やこの身にせまる搖るこゝろ

園太郎氏宅にて小時の吟

如しこゝろ月をみる

月をみる裾を落こゝろうらの秋

中秋の月を拾子と遠蕣を

かこふ赤紙月もつゝみ神迎

長崎諸詩の社をまゐり

ゆゝしきを京をうつる俳諸

十六社や市をしつゝ市の色

弱音紙赤ちんの月

西山をゆゝしを浪江月をこの年

宰府年納

茅秋紙白毛も神乃光れ

一戸や衣もやゆゝ弱むこゝ

茅ふ拭の紙をさゝきあぶ

暗より暗ゆりよ紀 祐乃邦

あ天風や赤ゝ木の寺屋ゝん

秋風と耳の紙ゝれゝゝ

吉備津宮奉納

秋ゝ世や異ゝひゝく吉備ゝ

[illegible]

小男鹿や小萩ちる頃の妻

啼鹿を推すまでもなきなみだ哉

[illegible]

[illegible]

伊都岐島まで

[illegible]

浦陰や通しも来るわたり鳥

[illegible]

[illegible]

道あれば人くくとうれもなつかしい

[illegible]

一茶法師と書き[illegible]侍る

[illegible]

長崎

[illegible]

雁の子の[illegible]

[illegible]

福島や[illegible]

同 墨濱まて

年老たる海女や鮑つり

先訪ふ秋の浦の新ふ

八月や紅葉きそめし

同 家

蘭の葉の葉の腰刀

有職故実撰ひし時入自

ともに書物の見せられに

除く説まて

鷺の巣や神ぞうの有職

松茸やくさくさ 蕎 此 先

老て神職ふるまひ人をかして

花も雲も晩秋 稲の多し神の秋

雖波津まて

芋の穂に著るや家の猫

雲の女高まて先の秋

中出ぬ春ぶ

秋の中月見まて菊の蒼こそ

菓咲の花根のかをりや 山 桐

籠前 情の多まて

菓子にまぶれて森たや清庇
自然の姿柿舎
柿ぬしや柿をたちのきあらしゆ
落柿舎感偶
柿買やつくれぬかくうき来客
芽立より二の葉まさりの柿の実と
文の字やかされしもいつ秋ぞや
有名な彼岸柿をもうちそのはし
庭のてふ柿ぬる柿ぬるぬる森の路
長崎をたゝ文者の達てる京の

ものとなつまられこそ
息吹ぬ数ゑ問まん長崎の柿
未ぬるを京ぬ京ぬとしまん柿
国坊まをて
法山乃芋麦ゆつや弥も吹く
唐人ぬ柿をたをつまを
人ぬをれぬるり
冥へとも中ぬ山秋をこのり 柿
葛ぬ侘
面技持をへつるの栗ぬ葛とも

讀甲陽軍鑑

あら蕎麦に信濃の武士を初
もきれを搗つる別に麦刈れ
雪渡院
楢に木の色もさめるや秋の空
うきくを[illegible]あ[illegible]

名

蕎に羽をかぶつる雨つるれ

この[illegible]に雨に雪帽子の上や雨の
柳ゐとて家[illegible]
いそこのしや神に[illegible]
一叶雨しくれて[illegible]
こ[illegible]に地も[illegible]
[illegible]や雨に[illegible]
[illegible]も先[illegible]
山雀の里かせ[illegible]
[illegible]物の[illegible]
[illegible]叶[illegible]

芭蕉病篤ふを聞て見
舞ひ来りて和尚舞さきりも
芭蕉の病中
白鄰のあまりまきの病や冬こもり
看病も一人前なり 炭 雄隙 月の雨
吉和中や竹雄隙 月の雨
芭蕉病中 和尚
赤のうし乃宗長直なる 鶴さま
傷元 成孫 孚

わきれば夏も十夜の淵こゑ
又ふるは詩よりも芭蕉の雨
ふるつれあきれ拾ふ名残
偶居しを人花さくれさ
鉢叩や茅陽の屋敷薬湯と
しんしん迫しる
胡蝶やん人参つんで暮まり
芭蕉 回忘よ義仲ふ
芭蕉 夜を袖敷しれ
ひこうるを来りの経を講

木曽墳より糸うを
船うつすと信濃や神無月
　松むしうつる
雨雲や四五里隔てて比叡嶽
鹿ゝゝゝゝゝと雲の門
世免よりせてを白つゝやかれの嶽
雪ぬ山かいてゝ掛もうつりわ
九ゝうゝゝゝれぬ雲の奥さゝゝ
海ゝゝ奥のこゝろゝゝ比ゝゝ
掛人乃ゝゝ通らゝ雪ぬ松

強ぬ中に居てゝ雪の山孤ぬ
雪ゝゝゝ鬼も拠を出ゝゝ
　悼　治化君
ゝぬ時ゝゝゝゝ花ゝゝゝゝ雪
愛ゝ廉ゝゝゝゝゝ　掛義町
　軍書ゝ捨ゝ
雪峰　松ゝ事盤ゝ嶽ゝ岩掛き
ひつゝみゝゝゝゝ峡の豊ゝ岳荘
松板ゝゝゝゝゝゝゝれ義
光武者ゝ指ゝゝれんゝあれ

紡僧丈の子

馬道や菴をとりかこまれて雲霧深

山畑やまきのこしたるみどりの

雲深く屑おれ毛長しみどりの艶

和七亭

雲月や日本橋とうとうとこもり

こうこう角へこうこう

故郷をとうとう問ふやみどりの艶

賀人筋波山摺集

木かくしや剣を吹くとうとうと

夕照ましらつく城跡このれ茂る

みどりこうれの未だ問ひん事なき変

寶物を蔵して拂ふ蔵主の事

常陸の茶を休しきを新や神送り

茶屋跡やたとへ別れて又の名

鶏鳴やたとへ年を十五年

尾張名古屋のきの海苔屋

そもそもきき霊宮こんぶ

物ものもの門ものもの鉢ものきき

茶事事也茶物ものもの鉢ものきき

松ものもの新敦

十銭を投しても百まての勢を得ても
旅人の銭をまうけれし餅の茶屋
摺の出家親子をかくす佛様かな
懐僧文字
書き捨や思ひつくほと山に上
堀川を通りて
手ぬくひ向ふの見へき屋さき角
出口の張替戸のみえし竈の家
李下の妻飛をやまるれるを
捲ろまても中の人陰ねかし

盗人をおひそらいかん飯の銭
法神楽や鳴とて敷くあやかん
老衆の口もとたし佛名
廣沢
池の面天のおもや南の山
詩歌風流の撰集を探し出す
集とせんそれもみなまちむしかは
ことし秋葉をよまて識出する
物さうなる人の中はれをわかるを
名を乗手なる大しもの流しゆりたる

[illegible]

行年[illegible]

[illegible]

神[illegible]

[illegible]

手[illegible]

[illegible]

[illegible]

加

[illegible]

十五夜[illegible]

日和[illegible]

年[illegible]